

若い力に励まされて

ディリープ チャンドラール

20世紀の最後の四半世紀に、世界中の動きとして中央集権型の政策から分権型社会へ移行しつつ、「協働（コラボレーション）」の必要性が指摘されてきた。グローバル化の元で、貧困の問題やアイデンティティの問題が激しくなり、地方、言語、宗教、芸術などにおける新たなコラボレーションの可能性が拡大されてきた。つまり、関わりをもつさまざまな主体が幅広く参加し、地域開発のためのパートナーシップを組み、協力していくことになる。この時代に、「エスニシティ」「マイノリティ」「ジェンダー」などの批判的研究を含む文化研究、コミュニケーション論、メディア研究、世論分析、市場分析、消費者の観点、法の役割、環境問題や貧困政策などの分野における知的創造活動の確立のため、地域研究所が大きな役割を果たさざるを得ないと思う。

21世紀の初頭四半世紀は、世界的にも、日本国内的にもさらに大きな社会変動が起こる時期であろうと予想されている。グローバル化がもたらした多様なプラグメンテーション（断片化）によって、地域・文化・言語的アイデンティティの主張が拡大し、その変容に伴う動向が目立ってきた。そのような動きに対応できるような、魅力に満ちた研究組織が構造されていかなければならない。

このような課題に対応するために、各個別分野の方法と手順にこだわって行なわれる研究も大事ではあるが、現代社会に日々起こる多くの課題は、個別分野の発想と方法だけによる対応では処理できないという問題提起がされている。そこで求められているのは、細分化された問題に対して多面的で、多元的角度から分析できるグループ研究や学際的研究である。個別学科・分野の手順や方法論の有効性を保持しながらも、それぞれの枠に拘束されず、もはや

枠や構造を超えた、複合的視点の確立に向けた学術的支援環境づくりが地域研究所の中心的役割になるといえよう。

私は、コミュニケーションの原点にもどり、人間の社会関係を保つ、人間社会に幸福をもたらせるコミュニケーションの要素に重点をおきたいと思っている。日本のこれまでの一方通行的な教育では重視してこなかったコミュニケーション技術、第三世界の多くの国にとって重要な民主主義的合意形成に至る談話技術、見えない合意形成の手段として日本の「根回し」習慣が果たす役割などについて大変興味を持っている。私も含めて大学教員のコミュニケーション能力の低さを日頃から実感しているので、このような研究を通してFDにも貢献したい。（どこが学際的か、という声がどことなく聞こえてくる。）

最近、日本企業に対する一つの辛口批判を読んだ。「これからの世界戦略は、「国」ではなく「言語的地域」「民族的地域」「文化的地域」というような観点で発想しなければならないのだが、ほとんどの日本企業は、その準備がまったくできていない。」（大前研一、『プレジデント』2003. 11. 17号）それなら、大学の教育研究分野においても、その責任があるのではないかと思う。

問題解決のためには、学び、主張し、行動すること、共有と協力、ビジョンづくりなどの共通基盤が必要である。最近、私はこの面で私たちの生活世界を改めて見つめ直してみる機会に出合った。

それは、沖縄離島の伊江島の財団法人「わびあいの里」の主催で2004年3月20日、21日二日間におわたって開催された、「第3回ゆずり合い、助け合い、学び合う会」に参加し、学んだことである。基調講演、交流会、分科会と全体集会、伊江島平和

ガイドなどの様々なプログラムで構成されたこの学習は、私を含めて多くの参加者にとって、今の世界について、やるべきことについて、教育のあり方やコミュニケーションのあり方についていろいろ思い起こさせてくれた。

その中でも一番感動したことの一つは、交流会の時間に、伊江小学校の27名の生徒たちが上演してくれた児童劇である。この劇について少し紹介しておく。

沖縄戦が終わった後、2年間もがじゅまるの木の上で隠れて生活していた人がいたそうである。その本人、85歳の佐次田秀紀順さんから聞き取りをして、PTAの内間常善さんが実話をもとに脚本をつくり、小学校の玉城睦子先生が劇の指導を行なった。先生の指導力がすごいと思い、私は、学習会の後、少し時間をいただき、玉城先生をインタビューしたところ、校長先生やPTAの理解と協力の上でこの劇の上演ができたことを先生が強調していた。

主催者によると、今回の学習会は、伊江島の非暴力・非服従の闘争に学び、阿波根昌鴻さんの残した膨大な資料を後世に伝えていくためにどのように活かすべきかを考え、また戦争へ向かおうとする時代の中にあって共に平和を発信していくねらいがあった。自分が住んでいる土地の歴史と前世の戦いを知り、地域アイデンティティを確立する手段として、この歴史的体験を共有してもらうためのコミュニケーションの手段として、さらに「保護の対象」よりも自己表現の場として行なわれる芸術活動の可能性を見事に見せてくれたこの劇の上演が学習会の目標達成に多いに貢献してくれたと思う。知的活動とともに、人間の感覚、感受性、感動に触れるものを育てるという意味で、地域研究所は将来このような芸術活動も支援していくべきだと私は思う。

これに関連して、地域研究所が行なっているジュニア研究支援活動は時代のニーズに合った、共に生きる未来のために、次の世代のために貢献するプログラムとして社会的評価を得ていることに違いない。小・中・高校生が地域研究を通して自らの学びの心、感覚、思い、視点を報告する姿を見て、いつも感動する。

もし将来、アジアの隣国まで広げて、支援活動を行なうことができれば、例えば、報告書やポスターなどを送ってもらい、展示したり、年に1回か2年に1回、一組かその代表を沖縄に呼んで発表会に参加させたりすることができれば、すばらしい交流ができ、共に未来を考え、語り合える仲間がきっと増えるだろう。

若い人達が自信をもって、社会や未来のより望ましい変化に向けて、行動し、主張するようになれば、大国中心の平和づくりの限界が見えてきたこの時代に、私達も勇気づけられ、より望ましいビジョンに向けて、協力できるようになると期待している。